譯者註

——第二編——

【譯者註一】(本文一七頁)アリストテレースが家計(家政)と營利とを分ち、前者は市民として營まざるを得ないと共に、寧ろ積極的に巧みに之が經營を計ることを、市民の當然なすべきことゝしたのは、廣く其の人生觀、社會觀等から出立して解釋すべきものであると思ふ。素より此所に其等を詳說することは出來ないが、自分は讀者にさう云つた解釋をして頂き度いと希望する。これはアリストテレースにのみ限られたことではなく、經濟上の思想と倫理上の思想と政治上の思想とが、希臘思想家の頭にあつては一般に殆ど分け難き迄に融合相關連してゐるといふことは、既に陳套な事ではあつても(A. U. Trever, A History of Greek Economic Thought. p. 10) 玆に重ねて斷つて置くことは全然無駄なことではあるまい。夫れといふのは、此の家計と營利との別に關する考へも、有名なアリストテレースの財貨の區別(本來の使用と、不自然な使

用とに從ふ別）も、現今では科學の分野として峻別されてゐる之等のものが、關連融合してゐる場合には、極めて自然に流出する考へだからである。トレーヴー氏は（同上一〇頁乃至一三頁）、此の希臘經濟思想の特色を項目に別つて擧げてゐる。之は同時に該思想の胚胎する原因の說明ともならうかと思はれるので、要約して記せば、（一）ソークラテースの思想が大きな影響を與へたこと。即ち善を以て最上の目的とすること。（二）希臘の道德思想が國家の福利を以て其の究極の點としたこと。之に就てはトレーヴー氏はプラトーンの之に對する偉大な反對の思想のあることを看過してゐるが。（三）希臘思想が寧ろ感情的（センチメンタル）であつて、物資其のものよりも人間味に富んだものであること。（四）禁慾的傾向のあつたこと。（五）社會主義的傾向を帶びてゐたこと。即ち個人生活を國家又は團體生活に從屬せしめた事を指してゐるのであるが、之は寧ろ直接に團體生活を重要視したことゝ云つた方が、當を得てゐるやうに思はれる。

此の中希臘の經濟思想一般に亘つて深く又廣い影響を與へてゐるものはソークラテ

ースの思想、即ち人生に於ける至高善の統御の思想であるといふことが出來やう。勿論之はソークラテース前時代は包括せず、又其の後と雖も學派を異にする場合には、等しい影響を持てゐるものでない事は云ふ迄もないが、其の直（じき）弟子たるプラトーンのイデア論、其の道德觀、從て社會觀への適用は著しいものであり、宴會篇に於ける有名なプラトーン的愛も亦其の一表現に外ならない。アリストテレースにあつても至高の觀念は、其の素材から形式への進化開展が之を認識してゐ、凡てのものは此の向上運動の手段として、最も大きな意味を持つべきである。即ち人生としての完成、市民としての完成に役立つことが、其の最上の意味で、人生からする價値評價は、此の一元に依て統一されなければならない。即ち人生の行動は其の至上の目的を持つのであるから、經濟行爲並に經濟生活も亦、其の手段としてのみ意味あり、爲めに經濟生活又は經濟行爲中だけに、人生の目的をとぢ籠めて了うクレマチスチックを、人生としては勿論、市民としても排斥したのは當然な歸結だと云はなければならないのである。

富について『富は家計又は國家で用ひらるべき多數の道具だと定義することが出來やう』(Politics tr. by Jowett, p. 41.)と云つてゐるのに依ても、略ぼ大體に亙つて其の意味を推測し得るものである。又當時希臘の經濟生活及び其の組織をも知ることは、アリストテレースの說を理解するに重要なものであること勿論であるが、玆には割愛して差支へあるまいと思ふ。

【譯者註二】（本文二一頁）此所にジェームス・ミルの『資本は財貨なり』といふ引用をし、前の註でセーの『物質の價値なり』と云ふ引用をしてゐる。元より此の引用をしてゐる本文から云へば、セーを引いてゐる所では、形式を離れた謂はゞ資本の素材を說き、ミルの說の所では其の形式を述べてゐるのであるから、敢て妥當を缺く引用とは云へないが、資本は價値なりといふ近世的な言葉に對しミルの言ふ所は、讀者の眼に如何にも唐突に映じはしまいかと思はれる。併しミルが此の場合資本を以て價値なりと云はずに、財貨なりと特に云つてゐるのは、價値が何に依て創造されるかを問題

としてゐる場所だからであつて——換言すれば價値實體は費されし勞働なりと云はうと欲する論證の場合だからであつて、此の價値實體が確立されて終ひさへすれば、其の本質に於て資本は價値なりと云つても、ミルには毫も差支へないものである。從て讀者はミルの資本に對する解釋を知られる上には勿論、又資本の具體的方面の性質を知る上にも、今少しミルの說く所を詳細に知られる必要があらうと思ふ。然るに其の著 Elements of Political Economy.は年代が經つてゐる爲めに、手近かに見るの便が少いから、讀者に役立つと思はれる此の句の前後を少しく譯出して置かうと思ふのである。即ち

『資本は皆な實際には財貨からなるものである。農夫の資本は農夫の持つ貨幣ではない。何となれば農夫は貨幣を生產に宛て用ひることが出來ないからである。彼れの資本は、其の道具と家畜から成る。

資本は皆な財貨から成るのであるから、第一の資本が純粹な勞働の結果であつたものでなけ

ればならないと云ふことは、言ふ迄もなく其の結果生ずる所である。第一（當初の意）の財貨は、之に先立つて存在する財貨に依て造られることは出來ない。

乍併第一の財貨、そして第一の資本も勿論、純粹な勞働の結果であるならば、之と交換される他の財貨の分量は、勞働に依て評價されなければならぬ。之は吾人がいま是認した命題の直接の結果であつて、卽ち勞働が生產の唯一の用具である場合には、交換價値は財貨の生產が要する勞働量に依て決定される。

之が是認されゝば、凡ての財貨の交換價値が勞働の量に依て決定されると云ふことは、必然な歸結である。

いま述べたやうに、第一の資本は純粹な勞働の結果であるから、其の勞働に相應した價値を持つ。此の資本は生產に協力する。そして資本が生產に携はるや、生產される財貨の價値が資本の價値に依て決定されると云ふことは論爭される。併し其の資本夫れ自身の價値が勞働に依て決定されるといふことは、吾人の現に認めた所である。故に資本の價値を越えて夫れ以上に、價値が夫れ自身決定される所のものは何ぞやと問はなければならない場合には、生產物の價値

は資本の價値に依て決定されると言ふのは、何にも役に立たない事である。生產物の價値は資本の價値に依て決定され、資本の價値は勞働の量に依て決定されると云ふのは、生產物の價値は勞働の量に依て決定されると云ふことである。』（同上、一八二四年第二版九二頁—九三頁）

『寔に、財貨の價値が最終の標準として資本に據るといふのは、凡ての不合理中最も顯著なもの、一である。資本は財貨である。然らば若し財貨の價値が資本の價値にかゝるならば、其は財貨の價値にかゝるのである、財貨の價値が自分自身にかゝるのである。之は價値の標準を指摘するものではない。之は其の目的に明かに又完全に無效な企てをするものである。

かくて最も明白な論證に依て、財貨が相互に交換される割合は、結局勞働の量が決定すると云ふことが明かになるのだ』（同上九四頁）

依て此所にミルの謂ふ意味は極て具體的な資本を指し、其の素材は其の價値卽ち勞働なる實體であるから、「特殊な現象形式」として見るものであることが理解されるであらう。そして此の資本の素材又は內容又は本質的方面の特質と、特殊性を持つ現象形式又は具體的方面の特質とは、マルクスにあつては有名な餘剩價値起源の說明に重

い役を演ずる價値增殖行程と勞働行程とに開展されてゐるものであることは、第三編（本冊中）に至て讀者の成程と會得される所である。クラークの『資本』と『資本財』との區別は、其の根底に於て又此の思想を展開したものであるから、序に一言して置く。

『資本』と『資本財』(capital and capital-goods)の對照に於て、クラークの擧げてゐる最も著しいものは、資本は恒久を以て常態とするが、資本財は費消破滅されるのを以て常態とすること、及び資本は流動性のものだが、資本財は之を缺くことである。卽ち資本と資本財との區別にあつては、資本財はミルの所謂財貨であつて、マルクスの謂ふ「特殊な現象形式」である。クラークも亦形式と云ふ言葉を使用してゐる(J. B. Clark, The Distribution of Wealth. p. 118.)。故に之は生産に携はると磨損消耗を免れない。寧ろ其の消耗が之を生産に使ふ目的であると云つてもよい位である。磨損消耗を避けやうとして生産用具を運轉使用せずに置いては、夫れは資本財の役目を果すことは出來ない。然るに此の資本財の抽象である價値は、生産が失敗に終る場合は別として、常

態に於ては生産に依て低減を蒙つてはならないものである。故に恒久性を持つと云ふのだ。又流動性と云ふのは甲の産業から乙の産業への流動であつて、例へば漁業に資本が投ぜられた場合に於て、漁船なる具體に投ぜられた資本は、夫れから回收して工場に投ずることは出來るが、漁船なる具體を其の儘工場として使用することは出來ないと云つた性質のものである。卽ち資本としては他の産業へ流動し得るが、資本財としては之が出來ず、或る生産部門又は之に技術上類似したものにのみ固執するを指すのである。

【譯者註三】(本文三三頁)單に利用を增加するから夫れが生産だと云ふ漠然たる考に對して、如何に鋭い皮肉が浴せられてゐるかを讀者に注意して頂きたい。此の點について註釋をつける目的で數回、數頁自分は草稿を認めて見たが、餘りに廣範圍に亘つて論じなければならないので、今はほんのヒントにもと思はれる注意書丈に止めて置く。夫は讀者が生産の意義、價値の生産の意義、餘剩價値（後にマルクス自身詳說し

てゐる）生産の意義等について、判然たる異同を知るに努められたいと云ふ希望である。コンディラックが此所に異なつた利用が交換せられると云ふのは、直ちに之から交換の具體的な利益利潤を求めやうとするやうに思はれるが、利潤は決して利用から生ずるものではなく、確定した一貨幣額と他の貨幣額との間の相違から生じ得るだけである。マーシャルの謂ふ消費者餘剰と、生産者が得る餘剰なる利潤との本質を、直ちに同性質と考へ、同じ内容の形式上の變化だけだ等と思違へをするのと選ぶ所はない。現代の經濟組織に於ては、利用は主として消費の觀念である。

【譯者註四】（本文四九頁）マルクスは此所に平均價値、卽ち Durchschnittspreis と云ふ字を用ひ、之と商品の價値とは合致しないと說いてゐるが、資本が結局商品の價値に依て成立すると共に、平均價格に於て成立することを認めて居るのは、兩者の内容に於て相近いことを是認するものと云へやう。併し此所にスミスとリカルドとを引合に出し、說明の便に宛てゝ居るので、讀者は若し機會があればスミスについては富國論

の第一卷第七章に於て、リカルドに就ては原論第四章に於て、共に所謂自然價格と市場價格との關係を說明してゐる條につき、概括的にも夫等用語の意味を知つて置かれることが便利であらうと思ふ。平均價格が價値量と合致しない譯は、市場では商品が價格を以て賣られ、之には一時的現象としては少くも需要と供給とに變動が起り得、爲めに價格が價値から上下して設定されるし、此の價格の價値からの上下は、其の上下の高を相殺しても必ずしも零になると限らないからである。自然價格は、卽ち生産者から見た生産物の貨幣での價値は、此等價格變動の中心を與へるに過ぎないものである。要するに玆でマルクスの謂はふとしてゐる所は、資本の發生は、卽ち元の價値以上の價値增殖である利潤の發生は、市場價格の動搖、若しくは商品交換の法則を亂すことに依るものではないと云ふ事である。尙價値と市場價値との關係は第三卷に至つて詳細に考慮すべきものであることを記憶して居て頂き度い。

【譯者註五】（本文六〇頁）一定の場所及び一定の時代に於て、勞働者の必要生活資料

の大體が一定してゐるといふ事は、消費には必要の部分と贅澤に屬する部分との境界があるにしても、極めて不確定のことであり、又生活資料の標準が、勞働者の屬する階級又は職業の相違に依て各傳習的に決められ、之が又極て區々であるから、甚だ大薩張りな精密の缺けてゐることのやうに思はれるが、勞働力の價値に對して唯一の基礎を與へる頗る重要な事柄である。之は又時間的に見ても興味あるもので、いま參考の爲めだけにウェッブ夫妻の著 Industrial Democracy に擧げてある三の職業に關する十九世紀後半の平均賃銀表を擧げて見ると左の通りである。之は大體に亘つて同一職業内に於ては一時代許りでなく、相當の期間に亘つても殆ど一年一年の間に大した相違もなく、傳習的に定まつてゐる事を知るによい例であつて、此の必要生活資料の高が勞働者の生活程度を決めるものであることは云ふ迄もなく、之は又スミスの云ふやうに勞働の自然價格に標準を與へるものである。

（一クォーターは約一石六斗一升）

年代	ロシアンスに於ける炭鑛鑛夫の一週平均賃銀	其の一週の賃銀にて買ひ得る小麥クォーター量	グラスゴーに於ける石工の一週平均賃銀	其の一週の賃銀にて買ひ得る小麥クォーター量	ロンドン植字工の一週平均賃銀	其の一週の賃銀にて買ひ得る小麥クォーター量
	片		片		片	
1846	14—4	0.26	…	…	33—0	0.6
1847	16—0	0.23	…	…	33—0	0.47
1848	15—0	0.20	…	…	33—0	0.65
1849	15—0	0.34	…	…	33—0	0.72
1850	15—0	0.37	20—6	0.53	33—0	0.82
1851	14—6	0.38	20—6	0.50	33—0	0.86
1852	14—5	0.35	25—0	0.47	33—0	0.81
1853	14—3	0.27	25—0	0.35	33—0	0.61
1854	15—0	0.21	25—0	0.33	33—0	0.46
1855	15—7	0.21	25—0	0.33	33—0	0.44
1856	16—8	0.24	30—0	0.43	33—0	0.48
1857	16—2	0.29	23—9	0.42	33—0	0.59
1858	15—1	0.34	25—0	0.57	33—0	0.75
1859	16—3	0.37	25—0	0.57	33—0	0.75
1860	17—0	0.32	25—0	0.47	33—0	0.62
1861	17—0	0.31	23—9	0.43	33—0	0.60
1862	17—2	0.31	23—9	0.43	33—0	0.60
1863	18—0	0.40	23—9	0.53	33—0	0.74
1864	18—2	0.45	23—9	0.59	33—0	0.82
1865	18—0	0.43	28—6	0.68	33—0	0.79
1866	17—8	0.35	27—7	0.55	36—0	0.72
1867	19—8	0.31	28—8	0.45	36—0	0.55
1868	17—9	0.28	28—8	0.45	36—0	0.56
1869	19—4	0.40	27—7	0.57	36—0	0.75
1870	20—0	0.43	27—7	0.59	36—0	0.79
1871	20—2	0.35	27—7	0.49	36—0	0.64

1872	23—4	0.41	29—9	0.52	36—0	0.63
1873	28—11	0.49	31—10	0.54	36—0	0.61
1874	30—0	0.54	34—0	0.61	36—0	0.65
1875	29—8	0.66	36—1	0.80	36—0	0.80
1876	28—2	0.61	40—4	0.87	36—0	0.78
1877	28—6	0.50	40—4	0.71	36—0	0.63
1878	31—0	0.67	27—7	0.59	36—0	0.77
1879	27—5	0.62	25—6	0.58	36—0	0.82
1880	26—10	0.61	25—6	0.58	36—0	0.81
1881	26—3	0.58	27—7	0.61	36—0	0.79
1882	26—3	0.58	29—9	0.66	36—0	0.80
1883	25—9	0.62	31—10	0.77	36—0	0.86
1884	25—9	0.72	29—9	0.83	36—0	1.01
1885	26—2	0.80	29—9	0.91	36—0	1.10
1886	26—3	0.85	29—9	0.96	36—0	1.16
1887	26—3	0.81	29—9	0.92	36—0	1.11
1888	25—4	0.80	29—9	0.93	36—0	1.13
1889	26—11	0.90	30—10	1.04	36—0	1.21
1890	31—10	1.00	31—10	1.00	36—0	1.13
1891	33—2	0.90	32—11	0.89	38—0	1.03
1892	33—3	1.10	35—1	1.16	38—0	1.26
1893	32—10	1.25	36—1	1.37	38—0	1.44
1894	33—10	1.48	36—1	1.58	38—0	1.66
1895	33—8	1.44	37—2	1.61	38—0	1.65
1896	33—3	1.27	38—3	1.46	38—0	1.45

【譯者註六】(本文六三頁)之は此の場所許りでなく、必要勞働と餘剰勞働を論ずる場合に、マルクスは屢々同じ假說を用ひ、必要勞働を六時間の勞働と假定してゐる。之

は素より微細な計算と見るべきものではなく、單に假說として讀者の承知すべきものであらうが、茲に合せて興味のあることは、近世早期の社會思想家中色々の基礎から必要勞働時間に當るべきものゝ算定をしてゐる者に乏しくない事である。そして其等が價値論上勞働價値實體說を採ること、從て勞働全收權の思想を抱く者であることは正に當然の行き道である。そして之等を知ることは、必要勞働と餘剰勞働とにつき一層明瞭を加へるものであると考へられるので、二三の說を擧げると、チャーレス●ホールは當時(十九世紀の初め)勞働者の生活に用ひた丈けの資料の生產には、其の勞働時間の八分の一若しくは十分の一にしか當らないと計算してゐる。即ち云ふ

吾人は上に述べて來た。貧民(the poor)の生產物の量は、彼等自身が消費する量よりも八倍又は十倍多額である。從て貧民が現時享有する物を得るには、彼れが現に勞働に拘束されてゐる時間の八分ノ一又は十分ノ一で充分である。若しくは貧民が更に豐かな供給を得やうと欲すれば、現に勞働に拘束されてゐる時間の四分ノ一又は三分ノ一で、自分自身及び其の家族にとつ

て澤山に得るに足りるべきものである。そして供給の豐かなことを欲するといふ事は疑のないことだ。(Charles Hall, The Effects of Civilisation etc, Phœnix Lib. 1849. p. 208)

ジョン・グレー(John Gray)は、其の著 Human Happiness 中で、生產者階級即ち勞働者階級は其の生產物の五分ノ一程を受ける丈で、殘餘の五分ノ四は地主や資本家の手に落ちて了うと考へてゐる。(Lowenthal, The Ricardian Socialists. p. 51.)又ジョン・フランシス・ブレー(John Francis Bray)は、其の勞働と資本との協力を目的とする氏の考案に依る社會組織にあつては、勞働の必要時間を現時のもの丶五分ノ一に減少することが出來ると云つてゐる(同上九七頁)。之等を考合すると、一見甚しい誇大とも見えるか知れないマルクスの必要勞働時間の假設計算は却て頗る溫和なものである事を知るであらう。

第三編

【譯者註七】(本文七三頁)普通大薩張りに生產行程として考へられてゐるものを、マルクスは本質を全然異にする二の見地から取扱つてゐる。一は技術的方面で、他は價値の方面である。此所に勞働行程として詳細な說明のあるものは、卽ち技術的方面であつて、價値方面は後に述べてある價値構成行程及び價値增殖行程の研究となるのである。若し技術的方面の前提なしに價値が構成され、增殖せられ得るならば、生產行程は少くも價値構成を目的とするものであるから、何等之を考慮する必要はない筈である。之はマルクスの謂ふG——G′への單純な轉化形式に依るもので、貸付資本、高利資本等は之に當るものであるが、此の種のものを度外視すると、多くの生產行程は此の簡單な轉化形式をとることは出來ず、G——W——G′に依らなければならないものである。之が價値構成に對する關係は、恰度價値に於て其の質的方面が量的方面に對すると同じである。少しく先廻りをしてG——W——G′の轉化を早解りのするやうに說いて見ると、之は左のやうな二個の等式の結合である。卽ちGとWとは等價物で、

$$G — W \cdots P \cdots W' — G'$$

G′はGと等價なのではなく、Wに其の量の增加なるwが加へられたるものと等價であるに外ならぬ。そして之等二個の等價式は商品市場で行はれ、交換形式の外に出るものでなく、從てWとW+wとの關係及び轉化の過程が、價値增殖を可能ならしめるものであつて、之は單に量的方面の考察即ち價値方面の考察だけでは解くことが出來ない。之が可能である爲めには質的方面即ち生產の技術上の方面に隱された秘密に依て量に於て轉化し難きものを轉化させなければならない。そして之を闡明するものが、マルクスにあつては之から述べられる勞働行程なのであつて、詳しく云へば勞働の消費行程である。讀者はかうした意味を頭に置いて、マルクス自身の勝れた說明に耳を傾けて頂き度い。

【譯者註八】(本文九二頁)價値增殖行程として自分が譯出した原語は Verwerthungs-process と云ふのであつて、英語には the process of producing surplus-value (餘剩價値生產の行程) として最も平易な意譯を施し、邦語では曩に福田博士が「價値付け行程」

の名を之に宛てられた。自分が拙案に依て之を「價値增殖行程」としたのは、自分の頭には此の方が平明に響くのと、verwerthen なる詞が元來利用すると云つた意味のものである所から、解し易い事を主旨として附けたものである。自分は專門語に對しても、誤解さへ起さなければ解り易いのが最上だと思ふ者で、讀者は之等の意味で其の何れをとらるゝとも最も好ましいものを採用すればよいのである。要するに其の內容は餘剩價値を生產する行程である事は、寔に其の意味に基いた英譯の通りである。

餘剩價値と云ふ言葉は既に本文十一頁(第六行)に使用されて居り、當初前拂された價値と、實現された價値とを比較し、其の間の增加差異を意味するものであることは、頗る理解し易くマルクス自身の說いて居る通りである。依て其の箇所を理解するには格別必要もあるまいと思つて、譯者の註は省いて置いたのであるが、餘剩價値は後に尙少しく詳細に述べるやうに、マルクス價値說の骨子であり、マルクス經濟學說の全部に基礎を與へるものであると云つても差支へない程重大なものである。若し力を强

めて云ふならば第一編の價値說は省いても、鋭敏な讀者には充分缺を補ひ得るとさへ云へるかと知れないものである。故に註釋の場所としては少しく不適當の嫌ひはあるが、此の思想の發達について少しく讀者に告げて置き度いと思ふ。

近世餘剩價値思想の發達を詳論してゐる『餘剩價値論史』(Theorien über den Mehrwert)に於て、マルスクばウキリアム●ペチーから說を起してゐる。次てダヴナン、サーダッドレー●ノース、ジョン●ロック、デヴイッド●ヒューム、マッシー、ゼエームス●スチューアートを經て、佛蘭西のフイジオクラットに至り、更に其後の發達を詳論してゐる。勿論玆に之等について一々マルクスの說を詳しく御紹介してゐる遑はない。けれども近世餘剩價値思想の發達の早期に於て、最も色彩の强いものはフイジオクラットの所謂『純生產物』(Produit net)の思想である。之は土地の總生產物から小作人が生產について負ふ一切の費用の補償を差引いた純粹の過剩收益を指すものである(August Back, Der „Produit Net" der Physiokraten, s. 25.)。此の費用は土地の準備

(avance foncieres)、根本的前拂準備(avance Primitives)及び年々の前拂準備(avance annuelles)の費用を總括するものであつて、第一の費用は地主にかゝり、土地を耕作し得る狀態にして冪く費用、即ち排水、灌漑、地ならし、其他耕作用土地に密着した設備を指し、第二の費用は耕作用の器具、家畜、肥料等に關するもので、之は次の費用と同じく小作人の負擔となるものである。第三の費用は小作人及び其の家族の生活資料、農業勞働者の賃銀及び家畜の飼料等を指すものである(同上)。そして之等の費用を差引いて尙『純生產物』を(地代となる)農業に於てのみ生ずる理由に對しては、フイジオクラットの殿將であるチュルゴーは明かに斯う說明してゐる。卽ち『土地が農業者に其の勞働の價格を支拂ふのは直接であつて、他人又は契約に依るものでない。自然は農業者と賣買を懸合ひ、强いて絕對的必要額を以て滿足せしめやうとはしない。自然の與へる所のものは、其の慾望に應ずるものでもなければ、又其の勞働日の價格に關する契約的な評價に應ずるものでもない。之は土地及び叡智の自然の結果であつて、

其は農業者が土地を肥沃ならしめやうとして使ふ手段や勞役よりも遙かに勝れたものである』(Turgot, Réflexions., § VII, Oeuvres de Turgot. Édit. par Daire, t. I, p. 10, 11. アッシュレー英譯本にては九頁) と云ふにある。然るに其の他の業に於ては此の自然の恩惠を缺き、彼等の得る所は單に其の生活を支へるに必要な額に止り、何等餘剩な生産物を生産することが出來ない。從つて夫れは不生産的な階級(classe stérile)である。そして農業が斯く『純生産物』を生産することが出來、勞働者は相互の競爭に依て生活資料しか得られないのであるから(デール版一〇頁)、其の結果此の餘剩生産物である『純生産物』は地主の手に歸し、地主は何等親しく勞働せずして之を掌中に收め、之に依て生活する事が出來るものである(同上一四頁)。之はマルクスの所謂餘剩價値と同じ範疇に屬すべきものであることは云ふ迄もない。併しフィジオクラットにあつては、餘剩價値は天然の恩惠のみから生ずるのであるが、マルクスにあつては資本――經濟上の一權力から生ずるのであるから、內容を異にしてゐることは云ふ迄もない。

唯だ交換に於て價値が增加しないと考へる價値法則に於ては、兩者共に軌を同じくするものである。

之より下つて近世經濟思想家中に餘剩價値思想を求めれば、スミスにもリカルドにも之を看出すことは出來るが、殊に餘剩價値否定の立場にある所謂勞働全收權論者又はリカルド派社會主義者と名附けられる人々の思想には、全部を通じて此の思想が色彩鮮明に流れてゐる。例へば前揭チャーレス・ホールは其の一人であつて、國民を分けて大膽にも富者と貧民(the rich and the poor)の二とし、論を進めて行くものは、寔に經濟上の權力の相違を確りと掴み、之に基いて勞働者の過剩勞働延て餘剩價値を認めるものと云はなければならない。其の權力に確固たる着眼をしてゐる事は、前揭書第二十六節 On Power と題する中で、其の種類を三に分ち、社會の輿論に依るもの、軍力に依るもの、富に依るものと數へてゐるのに依つて、知り得る所であらう。そして前に擧げたやうな割合で、勞働力の搾取を蒙つてゐる多數の人々が幸福を得る爲めに

は第一に各人は自己の家庭に必要な勞働だけし、第二に其の勞働の全果實を得るを要す(同上二〇七頁)と提案してゐるものゝ如き、マルクスと筆法は異にするも、充分な餘剩價値思想を抱懷せるものであることは疑を容れない。

アントン●メンガーが前掲『勞働全收權史』中で『後の社會主義者、サンシモン派、プルードン、殊にマルクス及びロードベルツスは、其の見解を直接又は間接に彼れの著作から汲取つた』(四八頁)と云つて以來、一部の人々の中には、マルクス說殊に餘剩價値說が全然之から流出してゐるかの如く思はれてゐるらしい、ウキリアム●タムソンは、字義其のまゝに餘剩價値(surplus value)と云ふ文字を使つてゐる。即ち云ふ『之に反し資本家の方法は、機械又は其の他の資本使用の結果、同量の勞働に依て生產される增加價値(the additional value)であり、かゝる餘剩價値は全部、資本家が其の資本を蓄積し又其の資本若しくは資本の使用を勞働者に前渡する聰明の優勝に對して自ら享受すべきものである』と。(Thompson, Distribution of Wealth. 2nd ed. p. 128, citiert von

A. Menger.) 寔にマルクス說と共通な箇所は此の餘剩價値と云ふ言葉の使用許りではなく、マルクスの商品に關する觀念は、タムソンの富に關する夫れと頗る似通つてゐる。例へば之を其の定義にとつて見ると『勞働に依て生產された願望の對象』を富と名付け(自分はいま英文の原本を持てゐないから獨譯本 Unters, über d. Grunds. d. Verteil. d. Reicht., übers. von O. Collmann.に依ると三一頁)、富の概念を決定すべき事情に二を數へ、一は願望の對象たること、二は勞働が之に使ひられなければならないことゝ分析し(同上三六頁)、又富を作る勞働の性質に就ては『動物の價値は、馱獸であらうと其の肉又は毛皮だけしか用ひないものであらうと、之を利用あるやうにするに必要な普通の體力と熟練とを持つ人間の平均勞働量に一に依るものである』(同上三二頁)と云つて、マルクスの單純勞働又は社會的勞働の觀念を髣髴せしめてゐる。斯かる一々の場合は到底此所に全部擧げ盡すことは出來ない。乍併之等共通な點ある故にマルクスの餘剩價値說の根本觀念とタムソンの夫れとを全然等しいと見、マルクス

說はタムソン說の單なる開展と見るべきものであらうか。此點に就ては前掲『リカルド派社會主義』の著者ローウエンタール女史は云つてゐる。『事實を確說するといふ範圍內だけでは、「餘剩價値の秘密」はマルクスを以て其の發見者とは考へ難い。之に就てはタムソンはマルクスに先んじてゐる。けれども產業上の機械の結果中に於ける此の價値の生產及び抽出に關する微細な叙述を與へやうとする試みに於ては、マルクスは少くもタムソンの關する限りにあつては又創說者である』(同上四五)と。蓋最も溫健な比較であらう。併し敢て此の言を呈するのは讀者の智識を無視することになるかも知れないが、餘剩價値を中心として開展し行くマルクス說の內容及び本質を、單に餘剩價値の發見に關する先驅者ありとの故を以て、之と同一視するの早計に陷ることは重々誡めて頂き度い。タムソンが屬する英吉利社會思想家とマルクスとの間には、思想の根底に於て甚しい相違が潛在してゐるのである。

夫れはタムソン始め近世英吉利社會思想家の殆ど全部が、其の思想の根底に於てベ

ンタムの功利思想を取入れてゐることである。最大多數の最大幸福を以て道德を律し、法規の基礎を確立しやうとしたベンタムの目的論的社會思想は、社會思想全部に亘つて非常な根本的影響を與へてゐるものである。經濟思想に於ても亦同じことで、レスリー・ステフアンが其の著『英國功利主義者』中に、ゼエームス・ミル、マルサス、リカルドを論じてゐるのでも見易いことであり、タムソン又ベンタムの信奉者であり、(前掲タムソン著書二二頁)、完全な功利主義者である。即ち其の『富の分配』第一章で『吾人が此所に研究しなければならないものは、最大多數の人間的幸福の最多量又は最大幸福を完成させる分配である』(前掲二二一—二二三頁)と云ひ、豫め此書の計劃を項目にして語つてゐる十五項を見れば(同上二二六—二九頁)、寔に一目瞭然である。然るに今後開陳される所に依て讀者は充分了解されるであらうが、マルクスにあつては彼れ自身は如何に實際運動に携はり、目的論的な行動があつたとしても—— 之は人間として當然な事であるが——本書に於て開展する所は所謂科學的なるものであつて、目的論的態

度は全然之を許さない。まして其のヘーゲル哲學の論法を所論開展の根本形式としてゐる點に於ては、純經驗的な功利主義とは判然旗色を異にしてゐるのである。

尙餘剩價値說又は之と腹合せになつてゐ、一身同體である勞働全收權說につき、マルクスの前驅(假令全部でなくとも)と見るべきものにつき詳論すべきであるが、之は後の機會に讓り差當ては前揭メンガーの書とローウエンタール女史のものとを讀者に推薦して置き度い。

【譯者註九】(本文九四頁)譯者註七に述べて置いたやうに、價値構成行程とは生產の價値側であつて、勞働行程の半面が價値につき如何なる行程となるかを說くものである。生產の目的は此の行程であつて、勞働行程が此の半面を伴はなければ、夫れは單なる消費行程である。

【譯者註一〇】(本文一一〇頁)此の結論だけを見ると恰もマルクスは餘剩價値の勞働者よりの搾取を肯定してゐるかのやうに見える。けれども數頁前で(一〇五頁)『故に

彼れは道德の報酬は道德なりとして自分を慰むべきだ』といふ痛烈に譴責を資本家の似而非節慾に對して浴せてゐるマルクスの言は、未だ讀者の耳朶に新たなものであらう。マルクスは餘剩價値否定がむねまでこみ上げて來るのを抑へて靜かに論理の途を辿り、勞働力の價値での賣買からは必然に此の結果の生ずべきことを讀者に語つてゐるものである。勞働力の價値での賣買——夫れは資本制生產に於ける現代の賃銀制度である。けれども自分は吳々も讀者に注意したい。賃銀制度の否定——マルクスは此所でそんな事は云つてゐない。彼れは賃銀制度の論理を研究してゐる丈である——は、直接サンヂカリズムを意味するものではないことである。サンヂカリズムの哲學『直接行動』は、マルクスの決して直接開展しなかつた所である。勞働力の價値が勞働の價値より低いことが『決して賣手に對する不正』でないことは、一に交換の原則から生ずる結果であり、等價物交換の商品市場の法則の必然の歸結であつて、現代資本制經濟生活の眞相を知るべき鎖鑰である。そして其の支持は後に賃銀論の所で述べるや

うにリカルドの賃銀説、マルサスの人口論である。

【譯者註一一】(本文一三二頁)此の點はマルクス價値説にとつては此上もなく重要なものであつて、餘剰價値の肯定と否定とは一に之にかゝり、不變資本可變資本の説は一に此の點を明かならしめる爲めだけのものであり、更に自分から見ると第一編の價値本質論の是非すら全部之に依ると云つても、差支へないものだと思はれるものである。生産手段の價値は、生産行程中で夫れ自身の價値以上に價値を生産し得ないか、否かの問題である。若し自己の與へられた價値以上に生産する能力があり、之を發揮し得るならば、マルクスの餘剰價値説は其の根底から覆されて終はなければならない。市民經濟學の通説は色々な名目の下に其の偉大なる生産力を説く。分配論上所謂殘滓説(Residium Theory)を採る者は、此の資本の生産力を積極的に認めると否とを問はず、平然として此の生産力を事實として肯定するものである。そして此の説のとる方法論の由て來る所は何か。曰くリカルドの分配論上の方法論である。

リカルドの分配論上の方法論は讀者の普く知る如く、頗る巧みなものであり、其の影響も甚だ大なるものである。分配の要素である三者はリカルドにあつては地代、賃銀、利潤と云ふ順序に配列されてゐる。此の配列の前後は決して單なる説明上の便宜の爲めにとられたものではなく、更に本質的に分配額の内容を決定する順序である。先づ或る生産行程の末に一定量の生産物が出來、之が一定量の價格に實現される。其の中から分配されるべき地代は、有名なリカルドの地代論に依ると、單なる土地の差益に依て決定され、價格構成の原因をなさず、價格決定の結果であるから、他の分配要素とは離れ獨立して決定されて了ふ。依て之は生産物の價格中から第一着に控除される。そして此の獨立要素である地代を差引いて殘つた價格が、他の二の生産要素である勞働と資本とに分配されることは云ふ迄もない。リカルドが繰返し説いてゐるやうに此の兩者は寔に利害相反したるものである。と云ふのは此の殘餘價格が勞働と資本との兩者に分配されるのであるから、一方が多くの分配に預れば他方の預る分配は

必然に少額となるべきだからである。そして此の兩生産要素の生産に關與したのは同時だつたのだし、其の何れの生産力が幾許の生産物となつて實現されたかは、寔に見分け難いものである。其處でリカルドは先づ勞働を其の科學の解剖臺の上に乘せて、最も科學的な、同時に最も冷血な自然價格を之に適用した。即ち云ふ『勞働は賣買され、又量に於て增減され得る凡ての他の物と同じく、其の自然價格を持つ。勞働の自然價格と云ふのは、平均して勞働者を生存させ、增加も減少もなく其の人種を永續させるのに必要な價格である』(マツカロック版五〇頁)。勞働の自然價格は決定された、勞働者の分配に預る運命は同時に決定されたのである。更に詳しい說明を求めると、

『勞働者が自己及び勞働者の數を維持して行くのに必要であるべき家族を維持する力は、彼れが賃銀に對して受くべき貨幣の量には據らず、其の貨幣が購入し、又習慣に依て緊要となつた(become essential)食料、必需品及び便利品の量に依る。故に勞働の自然價格は、勞働者及び其の家族の維持に要する食料、必需品及び便利品の價格に據る』(同上同頁)

『勞働の市場價格が其の自然價格を超過する場合には、勞働者の狀態は繁榮し、幸福であり、

又生活の必需品及び享樂の多量を支配するの力を得、爲めに健康な又多數の家族を養ふ力を得るものである。けれども高い賃銀が人口の增加に與へた奬勵の爲めに、勞働者の人口が增加される場合には、賃銀は再び其の自然價格に低下し、寔に反動の爲めに時としては其の以下に低下する。

勞働の市場價格が其の自然價格以下である場合には、勞働者の狀態は最も慘憺たるものであり、其の場合には習慣が絕對的な必需品とした享樂をも勞働者から奪ひ取る。勞働の市場價格が其の自然價格に上騰し、自然賃銀率が與へる相當な享樂を勞働者が持つのは、其の窮乏の爲めに勞働者の數が減少した後か、又は勞働に對する需要が增加した場合のみである』(同上五一頁)。

勞働の自然價格を構成する爲めに生きた勞働者のなす伸縮や、寔に自由自在なものである。爲めに勞働には自然價格が存在し、原則として之れ以上には勞働に對して要求することは出來ないことゝなつた。之が同時に勞働の生産物分配に與る割合又は額を決定するものであることは、云ふ迄もない。其處で地代を控除した殘餘の生産物の

價格中、又夫れ自身に內在した法則に依て獨立して決定される賃銀は再び控除される。かくて最後の殘滓は利潤として資本の生產力を聲高々と宣言するのである。リカルドは其の正否は何も云はない。而し市民經濟學の採つて自己を養ふべき果實は、寔に枝もたわゝに熟し切つてゐるのである。そして分配論上此の結論に達すべきことを豫期してゐる價値論の伏線が、其の原論の第一章に既に用意されてゐることは、注意深いリカルドの讀者の何人も眼を留めた所であらう。乍併吾人は已むを得ぬ場合の外は成るべく逆戻りをし度くない。之は讀者の研究に一任して差支へあるまい。

吾人は飜つてマルクスに就て想起しなければならない。價値を生產する湧出的な不思議な商品である勞働力は、生產費を要し、賣買されるから商品形式をとるものと見るべきだが、夫れ自身は價値ではない。價値は嚴密に云へば一の既成形式である。客觀化されたものでなければならない。そして既に客觀化された既成形式の轉化は等價物と等價物との間に於けるものを原則として來た。之は單に商品市場に於けるものに

適用される許りではなく、價値形式の轉化には凡て適用されなければならない——若し後者に適用されないことになると、形式轉化の點に於て全く同じ性質の前者に於ても吾人は疑を容れなければならない。寧ろ尙更ら疑ふべきであらう。玆に於てか吾人は第一編に於けると同じ問題に引戻されたのである。(第一編譯者註一、第七頁)

從來經濟原論と稱するものゝ研究方法に於て、或は無意識にさへ行はれてゐるのではあるまいかと思はれる程何の斷りもなく平氣で二の立場が錯綜して、價値現象に適用されてゐるやうに思ふ。自分は夫等につき差當り著書名を揭げて論證する暇はないけれ共、一般に生產論又は之に當るべきものにあつては、所謂國民經濟的立場若しくは社會的立脚地が採用されてゐるに反し、夫れが編を改めて交換又は交通、流通等と呼ばれる範圍へ來、價値、價格の問題へ來ると急轉直下して今迄の廣大な舞臺は消え去り、人形芝居のやうな小さな舞臺が開く。即ち自然、勞働及び資本と云はれる廣大な宇宙は急に縮小して、賣手と買手とが各自自分一個の利益の爲めに、小さな商賣を

譯者註第三編　一一

非常な熱心を以て行てゆく。價値法則や價格法則が構成されるのは、かうした場面に於てゞある。そして次に分配の問題へ來ると、再び表面だけは擴大されて土地の所有者、勞働の所有者及び資本の所有者が階級として相對峙し、最初の生産編に於けるが如き舞臺の儀容を備へる。乍併かくて生産編に對峙して表はれた分配編の内容を、生産編に於けるものと範疇を等しくすると考へるのは大なる誤である。生産に從ふ要素の名稱は、分配を受ける要素の名目と同じものであるが、其の内容に於ては甚しく異なる。卽ち同じ名稱の要素は生産から出て分配に這入るに先立つて、要素としてとは全然性質を異にする個々の取引主體として價値法則や價格法則を通過して來たのだ。生産に於て要素であつたものは、分配に於て階級に化けてゐる。之を同じものだと見てはいけない。階級になつた要素には價値法則又は價格法則、即ち個々が主體として取引したといふ要素の時には全然未知に屬する色彩が染み込んでゐる。到底之を洗滌し去る事は出來ない。此の色彩は何であるか？　曰く私有財産制度である。讀者よ！

此の言葉の意味を深く考へて頂きたい。淺學寡聞なる譯者は、生産と分配との說明の關係、生産要素と分配に於ける階級との關係につき、玆に述べる所と同じ說明に未だ接した事がない。少くも之れは自分にとつては獨創の考へである積りである。即ち階級となつて現はれるとき既に私有財産制度の色彩に深く染められてゐるといふことは、分配に至つて始めて問題とし、解釋すべき各生産要素の分け前が、既に流通なり交換なりを通り、價値法則又は價格法則を通るに及んで、未だ本然の場面に到達しない中に、既に決定され——賃銀、地代として——充分な仕掛けを施されて終つてから、分配の域に這入る事を意味する。之では分配の問題は殘されてゐないのだ。出立した立場から脫線して尙歩を進めて行かうとするのは、自己僞瞞か、頭腦の甚しい惑亂である。之れだけで吾人は學究上默認し難き事である。然るに迷混は更に擴大され、私人的立場——商賣人だけの經濟の立場で仕掛けたものを分配の範圍で開展する許りではなく、かうなつては當初の出發點に何の緣もない筈の結果を三度轉じて生産の範

譯者註第三編　一一

圏を犯し、勞働の生産力を其の賃銀に等しきもの、資本の生産力を其の利潤に等しきものとしやうとするのだ。かうなつては學識の圓轉骨脱も亦極り、到底吾々凡庸の頭には整理がつかなくなる。乍併見易いことがかうである。即ち第一に生産の要素があつた、之にあつては價値が生産されるといふ丈で、誰れの勞働でもなければ、誰れの資本でもない、第二に生産物が流通に表はれた、此所では自分のものと他人のものと云ふ事だけが天下を支配してゐる、勞働でも、資本でも、土地でも區別はない。單に私有權許りが存在する。第三に自分のもの他人のものから生じた取引契約が、私有關係の全然問題になつてゐない第一の結果へ跳込んで地主と勞働者と資本家との分配は第二の取引契約に依て決定されると共に、私有權を問題にしない第一の範圏に於ける各階級の分け前に依て決定されると考へるのだ。そして第四段目には、第三段の此の難解な綜合が濟むと、分配に於て各階級が受けた分け前は、生産に於ける各階級の寄與に等しいから第一に立歸つて此の範圏に於ける生産力の決定をしやうとするのである。

けれど之は方法論に於て錯亂し、前後相關連せざる黒白混淆である。依て聰明な研究者中には、通說の範圏と順序とを取らずに流通論許りで首尾一貫させやうとする試みがある。之は其の初めカール・メンガーの說いた所であつて、(Grunds. d. Valksw.) 分配を獨立した研究部門として取扱はない、近くはリーフマンも此の流をとる者で (Ertrag u. Einkommen.)、分配の問題をも價値價格の問題として取扱ふ者である。本邦では福田博士及び小泉信三氏が此方法を採つて書かれたものがある。之は素より方法論としては首尾一貫したものであるが、之は徹頭徹尾商人的取引關係に立つ賣買契約を基礎とするもので、私有財産制度を絶對的前提とし、從て此の立場を固守する限り階級間の問題、社會上の問題、分配上の問題等は、資本制生産の下に行はれる會計に對して之等が影響を持つ範圏に於てのみ問題を持ち得るものとなる。

其所で吾人は讀者に問ひ度い。以上の私有財産構の前提及び之から見る經濟現象の

研究以外に、用語は陳套であるが國民又は社會の立場からする鳥瞰圖として經濟現象を眺め、生産要素の協力作業から價値の生産される原因を見、各要素が之に參與し又は寄與する有樣を見る事は出來ないか。商品の價値は夫れでよい。而し其の生産に於て私有權を問題に入れないものでなければならない。依て此の如き見地を採る時は、生産の結果につき直ちに其の分配を見、從て分配を決定すべき各要素の價値生産に寄與した所が幾許であるかの問題を提起し乍ら、交換又は流通の價値價格取引關係から生ずる私有財産制を全然度外視して考へることが出來る譯である。然るに茲に一大原理がある。夫れは價値は人間に關して始めて生じ、始めて存在するといふ事である。いま生産に於ける要素を見るのに、私有財産制を別問題とする以上、資本と土地は人間の過去の勞働の結果としてのみ自由財と別たれる物質である。吾人々間の生産物の分配は無生物又は人間以外の生物に對してなされる必要はない。故に資本及び土地が生産に寄與したとすれば、其の意味は人間の勞働が費された意味又は部分に於てのみ

であるべきだ。之れ以外の意味があり得やうか。換言すれば人間の過去の勞働の具體である意味での土地と資本と、第三に生きた勞働者なる人間の勞力丈けが其の生産に關與したのだ。生産物を造り上げたのだ。勞働行程に依て生産物を獲得したのである。此の場合生産に用ひられる之等過去の勞働中から勞働者の生産中の生活資料を差引いたものが、生産手段である。そして此の生産手段が生産行程中に失はれた過去の勞働量以外に、勞働量を附加することも、生産することも出來ないのは當然の事ではあるまいか。果して然らば此所にマルクスが『生産手段が勞働行程中で、夫れ自身の使用價値の破毀により失ふ以上の價値を決して生産物に移轉するものでないことは』寔にマルクスの言ふ通り『顯著なことで』あり、又其の儘首肯し得る所ではないか。價値が生産され、移轉される行程は社會的行程であり、客觀の行程であつて、私法上の行程でもなく、個々の賣買當事者の主觀的行程でもない。之は價値構成行程であつて價値增殖行程でないからであり、後者に於ては所有權なる私法關係が必要條件となつて來

譯者註第三編　一一

る事は又云ふ迄もなく明かなことであらう。繰返し云ふ。價値が構成されると云ふことは絶對觀念であつて、私法關係に煩はされないが、其の增殖されると云ふことは相對觀念であり、私法關係に依て始めて生れ得るものである。價値構成にあつては價値が何人に歸屬するかは問題外の事に屬し、價値增殖にあつては特殊の人格に屬することが其の存在條件である。

此の註は隨分長くなつたが、併しマルクスの此の場所の論としては勿論過當に短かいことは重々承知してゐる。けれども譯註として、讀者に幾分のヒントを與へるには充分であらうと信ずる。後は右の結末を少しく明かにして置き度い。即ちいま論述した點が確立し、後に見える可變資本不變資本の別と其の作用についてマルクスの說を受容れるとすれば、夫れは讀者が容易に理解されるであらうやうにマルクスの餘剩價値說を全部許容することになる。そして其の餘剩價値說を許容することは第一編の價値本質論を離れても、商品が凡て勞働に依て生產され、商品の價値內容は客觀化され

た勞働量であると云ふことは必然の歸結とならなければならない。難解な價値形式を通らずとも、此所に餘剩價値說について不合理を看出さない者は、同時に價値本質論に於て勞働價値說に贊すべきものだと思ふ。自分が餘剩價値說をマルクス價値說の骨子なりと云ひ、マルクスの學說が之を中樞として考へるのは全く此の爲めである。そして此の中心思想に就ては、マルクス自身すら込入つた價値本質の論證から始めて、論理の開展の結果此の思想に到達したのではなく、前述したチャーレス・ホールが國民を分けて貧者と富者とにしたやうな、地面を確り踏みしめてゐる社會階級に關する觀照(Anschauung)が、牢固として拔くべからざる基礎をなしてゐたものであらうと思ふ。經濟上の權力の甚しい懸隔を見る者は、更に親しく體驗する者は、ホールに限らず、マルクスに限らず同樣の觀照を掴むべきである。資本制生產に於て之れ程驚異すべき特徵はない。自ら資本的耽溺か又は資本的虐げの中に深く陷つて、意識を痲痺しない限り之れ程强烈な色彩はない。勞働力——餘剩勞働の搾取！ 自分が第一編

の序文中に根本的な觀照と云つたのは之である。そしてマルクス餘剰價値説の疑ふべからざることに就ては、ベルンスタインはかう云つてゐる『かくて生産物中に包括される總勞働に依て生活する者は、活動的に之に携はる者よりも多數である。加之生産に於て活動しない階級が、生産的に活動する部分の者へ取除く比例よりも、總生産物の分け前を遙かに多くとる事は所得の統計の示す所である。此の生産的に活動する者の餘剰勞働は經驗上の事實であり、經驗に依て證明し得べき事實であつて、演釋的な立證を要するものでない。マルクスの價値説が正當であるか否かの問題は、餘剰價値説の證明には全然無關係である、此の點に於ては斯説は證明論題ではなく、分折及び説明の手段であるに過ぎない。(Bernstein, Die Voraus-setzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, s. 42.)

【譯者註一二】(本文一四四頁)可變資本と不變資本の根本觀念は、一度客觀化された勞働、即ち價値といふ價値は生産行程に於ても其の形式變化に依て分量上增加しない

事は、商品の交換行程に於けると同じと云ふ點に存する。故に本文に『之に反して勞働力に變へられる資本の部分は、生産行程に於て其の價値を變ずる』とあるは、例へば勞働時間が十二時間で必要勞働時間が六時間と假定すれば、十二に實現されるべき勞働力を六で買つたのであるから、其の實現された曉には六だけ價値を增加すべき仕掛が其の買入れの時から既に出來てゐるのである。故に資本の立場から云へば、勞働力の買入れに宛てられる部分は其の價値量を變じ、可變なものであるが、價値社會の廣い範圍又は私有權制を度外した範圍について見れば、價値となるべき潛勢力が價値なる現實へ變つた丈の事である。

それから之は御斷りするだけの事はあるまいが、不變資本と可變資本との區別は固定資本と流動資本との區別とは全然立場を異にしてゐる。後者の區別は資本の使用が一回丈で全部の價値を消費するか否かに依るものである。餘剰價値生産には何等關係がない。

【譯者註一三】(本文一五五頁)可變資本をして其の本來の職分を盡させる上から云ふと、寔に不變資本は缺く事の出來ないものである。けれども不變資本が可變資本の餘剩價値生產を可能ならしむるからと云つて、之を因果關係に置く事は出來ない。然るに此の場合資本の生產力說をとる者から見ると、此の存在條件を强いても因果關係にかへやうとする傾向があるので、此の節は特にかうした考を抱く者にとつて注意すべきものだと思はれるので、其の旨を註して置くのである。

【譯者註一四】(本文一九八頁)雇主と勞働者との間に於ける勞働條件につき階級爭鬪が資本制生產の歷史上の事實として生れて來る理由、有樣を叙述して來たマルクスの鋭い筆法は、譯者にさうであつたと同じく讀者にも非常に愉快な說明と思はれるであらう。階級間の爭鬪は力の爭鬪であり、權力の決定に依て一時均衡を得つゝ進み來つたものである。マルクスの研究家として秀でた人の一人であるツガン・バラノウスキー(Tugan-Baranowsky)は、一九一三年出版の小冊子『社會的分配說』(Sociale Theorie der

Verteilung.)中で、此の權力關係(Machtverhältnis)を齎し來り、混亂を極めてゐる分配論の問題を、其の混亂が主として由來する價値論から救はふと企てゝゐる。地代、勞銀、利潤が社會說の立場から何う處置されるかは、又後に紹介する機會もあらうと思はれるから、此所には省くことゝして、方法論上分配論を價値論と關連させる事を非難してゐる個所を二三擧げて、讀者の參考に供することゝしやう。

『分配論を價値論中に含ませるのは、方法論上全く誤つてゐる。何となれば違つた種類の所得の關係は決して個人的價値評價に基いてゐない。卽ち其の事情は、勞働者となり資本家となり又地主となり、そして其の勞働力、資本又は所有地に市場で價値を附けることは個人の選擇し得るやうなものではない。社會的分配行程に携はる者が悉く演ずる役は、其の社會上の位置に依て、卽ち何れかの階級に屬することに依て決定され、之は個人の意思に據るものではない。寔に交換行爲は又社會的行程である。併し之は價格論が個人主義的特質を持つことを妨げはしない。交換現象と分配現象との間には、卽ち次の相違がある。

交換行爲に於ては二人の個人が相會し、之は必ずしも違つた社會階級に屬さなければならな

いものではない。……

故に價格論は交換行爲に携はる者が社會上平等なりとの前提に基く。そして吾人が交換行爲に携はる者を、社會上平等なりとすれば、吾人は交換行爲が行はれる社會の内部の構造から抽象するものである。……

分配現象は全く之と異なる。先づ第一に分配行爲に於ける關係者は、單に社會上不平等である許りでなく、正しく此の不平等に該現象の本質があるのだ。……

商品交換の範圍に於ては、買手と賣手の役目は一定の商品に關して確定されてゐない――一定の商品の賣手は悉く其の商品の買手となることが出來る、之は買手と賣手とは同一な社會階級に屬するからだ。或る資本家が今日は木綿紡績所を持ち、紡績機械を買ひ、明日は其の紡績所を人手に渡し機械工場を得て機械の買手になることが出來る。

然るに資本家が勞働者を雇ふ場合には、買手と賣手の役は顚倒すべからざるものである。勞働力の賣手は其の買手にはなれない。何となればさうなるには彼れは勞働者階級から資本家階級へ移らなければならず、之は一般の場合としては不可能である。社會階級が異なるのは社會

的に不平等なのだ、其の譯は此の不平等が正しく社會階級の性質をなすものだからである。」(Tugan-Baranowsky, Sociale Theorie der Verteilung. s. s. 11—13)

かくてマルクスが價値說から出立したのは、其の見地が個人主義的のものである結果で、『寔にマルクスのやうに、個々の企業者の立場に立てば、利潤は價値現象として表はれなければならない』(同上二二二頁)併し『全體としての社會的經濟の見地に立脚すれば、資本主義的利潤を價値現象として見る必要は消えて終ふ』(同上同頁)と云つてゐる。階級對階級の問題としてのみ、そして其の過程を考慮せずに分配問題を取扱ふべきものとしたならば、蓋し最も當を得た見解と云ふべきであらう。依てマルクスの資本論の功績を

『彼れの一新時代を劃した業は、『資本論』中で資本制社會の經濟現象の背後に隱れてゐる社會的過程を、かく迄巧みに分析したることにある』(同上二三頁)

と云つて推賞してゐるのは、其の見地から當然生ずべき批評である。そしてかかる見

地を採る結果、階級としての資本家、地主、勞働者が得る社會的分配を決定する原因を、夫等階級の社會的な權力關係、從屬關係(Macht und Abhangigkeitsverhältnis)に置いたのは(同上五五頁)、最も明かな見解と云ふべきである。けれども之だけでは未だ全部を盡してゐるものではあるまいと思はれる。唯だ之が分配研究の方法論に於て確りした基礎を與へるものである丈は疑ひのない事であり、譯者が此の註を附けた所について讀者はマルクスに於て此の思想の充分抱かれてゐる事を發見する者であらう。

【譯者註一五】(本文二一八頁)此所に『一ばい時間』『半分時間』と譯出したのは、英語の full time 及び half time であつて、邦語で『一人前』『半人足』といふのに當たる。自分が此の邦語の慣用を直接充用しなかつかのは、勞働時間に重きが置かれてゐるので時間の字を保存し度かつたからだ。そして此所で讀者に想起して頂き度いと思ふのは、商品の價値內容をなし價値量を量る單位として、マルクスが第一編に用ひた『單純勞働』の事である。此の單純勞働と呼ばれるものには、能率の上から云つても、作業の

性質から云つても、各勞働毎に無數の相違のある事は何人も直ちに思ひつく事である爲めに、此の概念につき少からず疑が挿まれたであらうと思ふ。然るに事實の世界では之等微細な相違は、邦語で云ふ單に一人前とか半人足とか云ふ概括的な名稱の下に包括されて、雇傭取引にあつては無視されて終ひ、特別な熟練職工の外は此の範疇の下に十把一からげにされて終う。理論の世界よりも却て實際の世界で、『單純勞働』の概念は採用され、何等不審を打たれないのである。但し此の場合勞銀の考へを用ひるものでない事を承知して頂きたい。

譯者註終

大正八年十二月二十日印刷
大正八年十二月二十五日發行

資本論

第貳册

定價金貳圓五拾錢

原著者　カール・マルクス
譯註者　松浦要
發行者　東京市下谷區谷中三崎町四十八番地　天海重松
印刷者　東京市芝區櫻川町廿番地　淺野榮作
印刷所　東京市芝區櫻川町廿番地　株式會社大高印刷所

發行所　東京市下谷區谷中三崎町四八　振替口座東京四八六三四番　經濟社出版部

ナショナル・シチイ・バンク總裁　フランク・エー！
米國國際協會會長
國際銀行協會會長　ヴァンダーリップ　著
ミドヴェール鋼鐵會社社長
ドクトル・オブ・フィロソフィ　石澤久五郎譯

歐洲の經濟狀態は何うなつたか

新刊發賣

本書は米國實業界の代表的人物、最も進取的なる財政家ヴァンダーリップ氏の最近（今秋）の著にして、著者親しく踏査して炬の如き眼孔に映じたる大變革後の歐洲の經濟狀態を寫し出せるもの、事實の興味と透徹せる識見とは相俟つて宛然一大パノラマを見るが如し。就中金融界、投機界、商業界に活躍するの人士及び經濟學、社會問題に興味を有する人士の必讀すべき良書なり。

洋布製本　定價壹圓八拾錢
美頗本　小包料金八錢

▲發行所　東京市下谷區谷中三崎町四八　振替口座東京　四八六三四番　經濟社出版部▼

32

390
2

終